



## SSU部活動の活躍【女子体操部】

### 全日本学生体操競技選手権 1部初昇格

静岡産業大学 女子体操部 部長 館 俊樹  
監督 山本 新吾郎

第76回全日本学生体操競技選手権大会において2部団体総合優勝(2回目)を飾り、創部以来の悲願であった1部昇格を達成しました。

2004年から体操部強化をスタートし、2006年に女子1名が初入部。そこから数名の女子入部はあるものの団体出場に必要な部員数6名には届かず、個人での全日本インカレ出場が続いていました。2012年に3名の新入部員を迎え、初めて女子部員が6名となり全日本インカレの予選大会である西日本インカレに団体で初出場。2部上位4校の団体出場枠を獲得し全日本インカレに団体初出場を果たしました。

その後、年々女子部員数も増えて20名を超えるまでに成長。全日本インカレに団体連続出場を続けるが団体3位が最高成績でなかなか優勝には手が届きませんでした。地道に強化を進め、遂に2020年に2部団体初優勝を果たしましたが「2020年度はコロナの関係で1部2部の入替えは行わない」との特別ルールにより1部への昇格は叶いませんでした。

そして迎えた2022年度大会。ライバルである駒澤大学・日本大学との実力は拮抗しておりミスをしたら負ける状況でした。1種目の『平均台』は一番ミスが出やすい種目で、緊張からかまさかの3人が落下の大きなミスをする厳しいスタートとなりましたが、諦めることなく2種目の『ゆか』からは集中したミスのない演技を続け、1.401点の僅差ではありましたが2度目の2部団体優勝・初の1部昇格を勝ち取りました。

2023年度からは本学初の男女1部校のシーズンを迎えます。1部校としてのプライドを持ち、攻める体操で今度は1部上位進出を目標に日々精進していきます。



## Contents

- |   |   |
|---|---|
| <p>1 「SSU部活動の活躍(女子体操部)」<br/>全日本学生体操競技選手権 1部初昇格</p> <p>2 「第21回SSUスポーツ・健康科学セミナー報告」<br/>運動部活動の地域移行と障害者スポーツ</p> | <p>3 「第22回SSUスポーツ・健康科学セミナー報告」<br/>スポーツボランティアの可能性(静岡ブルーレヴズ)</p> <p>4 「SSU在学生の活躍」<br/>トランポリン部 又吉 健斗(経営学部4年)</p> |
|---|---|

## 運動部活動の地域移行と障害者スポーツ

東海大学体育学部体育学科 教授 内田 匡輔

(2022年8月23日, オンライン開催)

2022年6月6日に文部科学省スポーツ庁の「運動部活動の地域移行に関する検討会議提言」が出された。運動部活動の意義と課題、その課題への対応や改革の方向性が記されている。このセミナーでは検討会議座長を務めた内田先生を講師としてお招きして、下記のテーマについてお話いただいた。



- ① 運動部活動の地域移行の背景
- ② これからのスポーツ指導はどうあるべきか
- ③ 障害者スポーツの現状

○少子化の中でも、将来にわたり我が国の子供たちがスポーツに継続して親しむことができる機会を確保。このことは、学校の働き方改革を推進し、学校教育の質も向上。

○スポーツは、自発的な参画を通して「楽しさ」「喜び」を感じることに本質。自己実現、活力ある社会と絆の強い社会創り。部活動の意義の継承・発展、新しい価値の創出。

○地域の持続可能で多様なスポーツ環境を一体的に整備し、子供たちの多様な体験機会を確保。

＜指導者はどうあるべきか？＞

**指導者の質と量をどのように確保するのか**

対象は「希望するすべての生徒」  
→「すべて」が意味すること: 中学校等  
⇒義務教育学校後期課程、中等教育学校前期課程、特別支援学校中学部を含む。

どのようにコーディネートし、適切に支援するのか？

これまでスポーツが届いていなかった子どもに機会を確保し充実させる

これまで行ってたスポーツが継続できるように、指導員を配置し持続する

**運動がうまくできない子どもたちの思い**

子どもたちの声が教えてくれること

- ・同じように体育・スポーツ・運動を楽しみたい
- ・うまくやりたいけれどもできない
- ・学校の授業ではどうもうまくいかない

体育・スポーツの指導実践につなげる

- ・障害者権利の遵守
- ・運動発達を捉えなおす  
(平均台に乗る<相手がいる)
- ・アダプテッド=Adapted (=あきらめの悪さ)  
どこまでもできることを探す 色々な工夫を考える

**まとめ**

運動部活動の地域移行を進めていく上で……

- ① (まず)子どもと先生の現状を変える
- ② 地域行政の垣根を越えて連携する
- ③ 指導者の質と量を確保、担保する
- ④ すべての子どもにスポーツを届ける
- ⑤ 社会変革につなぐ(次世代への継承)

◎スポーツ庁のHPで運動部活動の地域移行に関する検討会議提言を見ることができます。



## スポーツボランティアの可能性 ～静岡ブルーレヴズの実例をもとに～

静岡ブルーレヴズ 佐藤 洋平



(2022年10月11日, オンライン開催)

ラグビーワールドカップ2019日本大会が終わり、日本ラグビー界は新しいフェーズに突入しています。その中のキーワードが「事業性」と「地域貢献」です。

それらを体現する手段としてボランティア活動をチームで行うことは非常に有効ですが、ボランティア基本三原則である「自主性」「公益性」「無償性」を体現するためには、運営側がコンセプトを描き、一貫性のあるマネジメントを行うことでボランティアからの共感を紡ぐことが何よりも重要です。

そういった意味ではボランティアは決して無償の労働力ではなく、興行の価値を高めてくれる重要なパートナーであるという認識を持つことが適切だと考えます。

### ①リーグワンと静岡ブルーレヴズのご紹介 まとめ

- RW C2019をきっかけに、日本ラグビー界は新しいチャレンジを始めている。
- 「事業化」と「地域密着」が大きな変化の方向性ではあるものの、過渡期である。
- そんな中、静岡ブルーレヴズは先頭に立ってチャレンジを続けている。

### ②人が組織にひかれる4つの要因 まとめ

- ボランティア基本3原則は「自主性」「公益性」「無償性」である。
- 「活動の魅力」「待遇の魅力」「組織の魅力」「目標の魅力」に大別される。
- 人は必ずしもお金だけのために働くのではない。※何を重視するのかは人それぞれ

### ③静岡ブルーレヴズの事例 まとめ

- 静岡ブルーレヴズには明確なコンセプトがある。
- コンセプトと一貫性のある活動内容等を設計している。そのため共感が生まれる。(合う人、合わない人が明確に分かれる)
- どのような共感を紡ぎ、提供するのかが、そのデザインと一貫性が重要である。

### ④スポーツボランティアの可能性について考察 まとめ

- 付加価値によってイベントの価値が高まる。
- コミュニケーション能力が高まる。
- ボランティアは無償の労働力ではない。イベントの価値を高めるために欠かせない重要なパートナーである。

静岡ブルーレヴズのことをもっと知りたい方は、こちらのQRコードからアクセスしてください。



# 活躍するSSU在學生をピックアップ



## インタビュー

### トランポリン部 タンブリング競技

静岡産業大学 経営学部4年

またよし けんと  
又吉 健斗

### プロフィール

沖縄県生まれ。両親が体操クラブを運営していることから、小さい頃から自然と体操競技とトランポリン競技を始める。小学校6年生でタンブリング競技に出会い、高校まで体操競技とタンブリング競技を両立する。在学中もタンブリング競技日本代表として数々の国際大会や国内大会で実績を残した。

## タンブリング競技の魅力を教えてください

タンブリング競技は、一直線を8個の跳躍技を組み合わせ、難しさや完成度を競う競技です。日本ではまだマイナーな競技ですが、いろんな宙返りがスピーディーかつダイナミックに行われ、最後に着地を止めるという、迫力の中にも人間の超人的なすごさを感じることができる所が魅力です。

## タンブリング競技と体操競技の両立で苦労したことはありますか？

2つの競技は似ている部分が多いですが、実際には器具のね方や技術の違いがあり、その感覚のズレを修正することに苦労しました。日々2つの競技の練習をすることは身体への負担がかなり大きく、練習後の身体のケアは特に大切にしていました。

タンブリング競技は、国内ではまだ発展途上であり、世界と戦うため何が必要かを常に探求しながら練習をしていたため、今自分がやっていることが本当に合っているのかなど不安の中で、練習内容や練習量のマネジメントを試行錯誤する日々でした。また、自身のメンタル強化のため、メンタルマネジメントの方法を学び、仲間とのコミュニケーションの重要性を理解でき、これらの経験によって更に視野を広く持つことができるようになったと思います。

## 卒業後は何を目標にどのような道に進むのでしょうか？

地元の沖縄県に戻り、両親が経営している体操クラブで、幼児体育や子どもたちに体操・タンブリングの指導をします。目標は、タンブリング競技の認知度や人気を更に高めて、タンブリング競技をオリンピック種目にする事です。そして、その時にコーチやスタッフなどどんな形でも関わってみたいです。そのための指導だけでなく、普及活動やイベントなどにも積極的に関わっていきたくて考えています。

## 又吉さんにとってタンブリング競技とはどのような存在ですか？

タンブリング競技は、自分が人生をかけて夢中になれるものです。そして人として成長をさせてくれたものであり、パートナーのようなものです。競技と向き合う中で、ポジティブな感情もネガティブな感情も繰り返し抱き、自分が生きているんだと強く実感させられることが多かったです。これからもパートナーとして共に目標に向けて進んで行きたいと思っています。

【インタビュアー】 スポーツ科学部 准教授 宮崎 彰吾

静岡産業大学  
Newsletter

静岡産業大学 スポーツ教育研究センター  
発行日 2023年2月28日 発行人 堀川知廣  
〒438-0043 静岡県磐田市大原1572-1 ☎0538-37-0191(代表)

